

南利幸さん

[気象予報士]

**自然に囲まれた環境で
のびのびと育った小学生時代**

私が小学生時代を過ごしたのは、岡山県倉敷市玉島。瀬戸内の海と山に囲まれたのびりした環境のもと、虫取りに魚釣りにと、まさに自然の中を「駆けまわって」過ごしていました。

当時はまだ、塾や習いごとが今ほど盛んではなかった時代。勉強した記憶はほとんどありません。ただ、地域で盛んだったソフトボールは、4年生から6年生まで、3年間続けました。

監督は、当時の小学校の先生。バイタリティーのある方で、朝練から放課後、休日の練習試合まで、熱心に指導してくださいました。試合の時には、一緒に勝負の結果を喜んだり残念がったりしてくださり、一体感がありましたね。練習で怒られたことも、今ではよい思い出です。

この時身につけたソフトボールの特技は、社会人になって人間関係の輪を広げるときにも大いに役立ちました。小学生のころに一生懸命やったことって、知らないうちに体で覚えているものなんですね。

気象情報の「舞台裏」

週末の「NHK ニュースおはよう日本」出演時は、通常、朝4時前に局に入ります。その後、気象データなどの資料を見ながらアナウンサー用の原稿を作成。伝える内容を精査し、頭の中で流れをつくっていきます。一方、もう少

し掘り下げて伝えた方がよいところは、さらに情報を調べながら肉付けをしていきます。

そうこうしている間に、5時50分の本番がやってきます。ここで初めてその日の気象情報を視聴者に伝えるのですが、話しながら、「ここは別の言い方がいいな」とか「こちらの情報に重きを置こう」といったように、次の時間帯に向けた改善策も同時に考えています。このようにして、登場するごとに、伝え方や内容を少しずつ改善しながら番組が進行。はっと気がつく、まだまだ改善の余地があると思っていたのに、最後の出演が終わっていたこともあります(笑)。

私が気象情報を伝える上で最も意識していることは、「減災」。聞いた人が災害に遭わないために、どのように情報を伝えればよいか、いつも考えています。声のトーンや画面表示など、工夫できることはいろいろありますが、中でも、どんな「言葉」を使うかは、とても重要だと思っています。

限られた時間の中で相手の耳に大切な情報を残すには、自分の使う言葉のむだをそぎ落とし、狙った場所に的確に刺さる矢のように、洗練されたものにしなければなりません。しかし、技術に目を向けすぎると、逆に失敗してしまう。さじ加減が難しいです。

実際、「今回の放送はうまくいったな」と思うことは、ほとんどありません。「もっとこうすべきだったな」「ああいう言い方はよくなかったな」と、反省す

ることばかりです。もしかしたら、最後まで満足することはないのかもしれませんが。

**人との交流を大切に
活路を拓いてほしい**

昔に比べて、今は、子どもの教育に細かく関与する保護者が増えてきています。そのために先生はより完璧を求められ、すごく大変だと思います。今、先生と保護者との間には、少し距離があるように見えます。地域の中の一員としてお付き合いができるような場所や機会が増えれば、もっとよい関係ができると思うのですが……。

一案として、保護者の中にいる「専門家」の手を借りてみるのもよいと思います。例えば私の場合、年に一度、小学校で「天気」の出前授業を頼まれて行っています。そうやって、地域の人や保護者との交流ができれば、何かが変わってくると思います。

私は今後、気象予報士の若手を育てたいと思っています。あこがれから資格を取る人は多いのですが、いざ仕事を始めてみて、そのギャップに挫折する人も少なくないのです。教師の仕事もそうかもしれませんが、資格を取るだけでなく、いかに専門的になれるかが大切だと思うのです。

私も若い時は、先輩と一緒に仕事をしながらいろいろ教えてもらいました。これからは、若い後輩の手助けをしつつ、一緒に伸びていけたらいいと思っています。

PROFILE

みなみ・としゆき●気象予報士・防災士・技術士(応用理学)。1965年兵庫県生まれ、岡山県育ち。広島大学総合科学部、同大学院生物圏科学研究科修了後、日本気象協会に入社。平成6年第1回気象予報士試験に合格。現在は「NHK ニュースおはよう日本」土日・祝日の朝の時間帯のほか、山梨・兵庫・京都放送局の夕方の気象情報に出演中。4人の娘の父でもある。

**どんな言葉を使えば「伝わる」か、
日々考えながら仕事をしています**